

くなつたことなどを受け、閻魔の追加募集と共に現在は一審制に改められている。

書記官である私は、そこではじめて、判決の結果を閻魔帳に記録する。内容は至つてシンプルで、死者の名と判決に直接関わつた罪状、そしてその結果のみである。すでに大抵の所業は、寿命管理の死神によって記録済みだからだ。

「……ふう」

死神達が部屋から出ていくのを見届けたあと、少女は小さく息を吐いた。

「これで今日の分はおしまいです」

腕を組んで伸びをすると、少女——四季映姫の表情はずつと穏やかなものになつていた。

「そして、あなたのお勤めもこれで完了とします。九度目の帰泉から百二十年、よく頑張りました」

「……ありがとうございます」

私は深々と頭を下げる。

「準備は全て小町に任せていますので、そちらから話を聞いてください」

「……」

「……あまりいい表情ではありませんね」

「あ。いえ……すみません」

私がぼんやりしているのを見透かして、閻魔は小さく咳払いした。説教を始める前の癖なのかもしれない。

「いいですか？ 不安を抱く気持ちばかりですが、迷いは生の本質です。あなたはあなたの使命を一途に果たしなさい。それが命有るあなたに出来る最大の善行です」

「……承知しております」

ぱたんと帳簿を閉じると、私はもう一度彼女に黙礼して部屋を出た。

ひとまず自室に戻るため、渡り廊下を歩いて宿舎に向かう。中庭では、休憩中の女性の閻魔達が手弁当を囲んでいた。普段は頬笑み一つこぼさぬ彼女達が和やかに談笑する姿は、彼女達もまた、一介の神様に過ぎないのだということとを思い知らされる。あの笑顔の裏で、人を裁くという使命の重圧は、一体どう受け止められているのだろう。

「おーい、お疲れさうん」

ふと呼ばれて前を見ると、廊下の途中で、高下駄に身の丈ほどの大鎌を持った女性が私を待っていてくれた。

二つ結びにした深緋（こゝろ）の髪に、青白の衣を纏った彼女の名は小野塚小町。三途の川の渡しを受け持つ死神で、私も幾度となく世話になつていく。

まあ、そう何度も世話になる者は少ないと思うが。